

被災者の声

地獄の底からわき上がるような黒い塊が街を襲った

宮城県気仙沼の被災地に救援物資を届けて聞いた震災の恐怖

矢部寛明

洞爺湖サミットがあった3年前、ママチャリで関東の学生ら有志が東京〜洞爺湖まで旅をしました。そのときに立ち寄った気仙沼のホテル望洋で、僕は一宿一飯のご恩をいただいたのです。一期一会の出逢いが多い中、僕はその後望洋の女将さんと連絡をとっていました。

東日本大震災が起き、巨大津波で東北の太平洋沿岸が壊滅的被害を受けていることを知り、いてもたっても居られなくなり、当時一緒にキャラバンをした従姉妹と共に3月19日〜25日、被災地救援へ行ってきました。

まずは宮城県仙台市に入り、避難所へ救援物資を届けました。さらに石巻へ向かうと、想像を絶する津波の被害で街は壊滅していました。「行けるものなら気仙沼まで向かいたい。社長や女将さんに救援を届けたい」との願いがさらに強くなり、なんとか望洋へ辿り着きました。

ホテルの社長加藤さんは、津波に襲われた時やその後の避難生活の話を、「普通のテンションで話すと泣けてしまう」と言

いながら話してくださいました。

11日強い地震が起き、ものすごい危険を感じてホテルの外に出た。ホテルは大丈夫だったが、すぐに家族の心配をした。子どもは学校。しかし母親が家にいることに気づいて必死に迎えに走った。母と愛犬を連れて高台のホテルに戻ると、周辺は逃げてきたたくさんの人であふれていた。

「津波だ！逃げる！」という声で海を見ると、地獄の底からわき上がるような黒い塊が遠くから街へと押し寄せてくるのが見えた。気仙沼は湾が狭くなっていくから、津波が近づくと水位があがって



陸に乗り上げた船が至るところに

いく。だーっと津波が来る時には怖くなって、さらに高い場所へと裏山へ逃げた。第二波、第三波が押し寄せる。波がボンボン、ゴンゴンと街へぶつかる音。呆然とした。街が死んだ。

静寂が訪れた。カラスの鳴き声だけが耳に残った。

夕方、黒煙があがった。送電線がタンクに倒れ、重油がこぼれ、炎上した。最初はぼつとした灯りだった。それが水平線の上に広がって黒煙と波とが風によって近づいてくる。赤い火がすぐそばまで来た。最初は、わーっと人の声が無数にした。そのうち肩を震わせ、すすり泣く人たちの声が変わった。呆然とした。

雪が降り始め、だんだん寒くなってきた。外は暗くなり、家を失い、行く場をなくした人がホテルの周辺にたくさんいた。海で溺れ、なんとか陸へ這い上がって震え上がっている人もいた。お年寄りもいた。

助けようとする一心で「座敷に上げる」と言った。ふすまを外した150畳の座敷に、客用の布団、毛布を出して提供した。暗闇の中でどれだけの人がいるか把握できなかったが、どんどんホテルの中に人を入れた。

12日。近くの食品加工工場に働いていた人がたくさんいた

め、その幹部から「300人受け入れてくれないか」と申し出があった。「寒さをしのぐだけでいい」と言われたが、ホテルの収容可能人数は100人。すでにキャパは超えていた。市の指定の避難所ではなく、個人の避難所。民間施設。それでも古い布団があつたため、工場の人たちを受け入れた。

今も望洋は、多くの避難者を受け入れています。そこへわずかながらでも救援物資を届けることができず。社長が僕たちと言ってくれた言葉、ずっと頭にこびりついています。

「このユニクロのヒートテック。僕にとって最初の財産になりました。本当にありがとう」仲間たちが集めてくれた義援金の総額は、3月24日の時点で145万円を超えました。これからも救援活動を続けたいと思います。ぜひご協力お願いします！

A

《義援金振込先》

三井住友銀行
上福岡支店
普通 6801483
矢部寛明